

復旦大学と国際シンポジウムを共同開催

「上海経済圏の発展戦略と外国直接投資」

国際協力研究科長

◆ 山下 彰



復旦大学逸夫楼で 一参加者全員で— (1994年11月1日)

高度経済成長を続ける中国経済。中国について、今後、政治・経済、文化、歴史、地理など、多様な側面が紹介され、語られるであろう。

広島大学は、復旦大学（中国上海市）と大学間協定を結んでいる。

国際協力研究科は、その復旦大学と共催で、昨年（一九九四年）十一月、復旦大学の逸夫楼において、「上海経済圏の発展戦略と外国直接投資」をテーマとした国際シンポジウムを開催した。

二日間のシンポジウムには、日本からは、大学研究者や企業のトップなど四十名が参加し、上海側からは、復旦大学のほか上海市政府、民間企業合わせて約百三十名が参加した。これに現地駐在の日本人、日本からの留学生の参加者を加えると総勢百八十名を超え、大盛会であった。藤田雄山広島県知事も挨拶に駆けつけていただいた。

今回のシンポジウムの開催は、両大学の交流を一層推進し、学術的な成果を積み重ねていくステップになったと考えられる。

開催までの経緯

このシンポジウム開催の話は、一九九三年の十一月頃、復旦大学に新設されたばかりの復旦発展研究院（院長 楊福家復旦大学学長）から持ちかけられた。

内容豊富なシンポジウム

シンポジウムでは、上海経済圏の二十一世紀ビジョン、浦東新区の開発の現状、長江デルタの開発構想、上海地区および長江三角洲の投資環境分析などの上海経済圏の諸問題に関する報告



挨拶をする藤田広島県知事（座長 山下研究科長）

国際協力研究科としては、相手が中国で最も有力な大学の一つであり、私のところは復旦大学からの院生を預かっていることもあって、話ほとんどん拍子で進み、九四年一月には開催についての契約書にサインを交わした。

シンポジウムのテーマは、双方の関心から「上海経済圏の発展戦略と外国直接投資」と決まった。報告者は、最終的に日本側が四人、中国側が六人となった。全員二か月前までに報告論文を提出し、復旦大学側がすべて中国語と日本語に翻訳してくれた。復旦大学に留学している日本人学生も翻訳作業に活躍したことを後で知らされた。